

## 論文の和文要旨

論文題目

安部公房における引揚げと検閲  
——初期作品を中心として——

氏名

解 放

本論文では、安部公房の『砂の女』以前の作品を対象として、作者の戦中、戦後の実体験と、その文学テクストが示唆する複雑な意識の葛藤との関連性を考察することによって、初期の安部公房の思想的転換のプロセスを明らかにした。本論文は八章に分けて、以下のような結論を見出した。

第一章では、引揚げに関する同時代の記述と比較した上で、安部の引揚げ体験が帯びる特徴を明らかにした。敗戦後の海外在留邦人は軍人と一般人を含み、合計 600 万人以上いたと推定される。引揚げ者たちは、食料と衣料不足のため餓死や凍死者が続出し、また伝染病の流行によって多くの死亡者を出した。しかし、安部一家の引揚げは比較的平穏で、このような過酷なものではなかった。終戦から 1960 年代後半まで、引揚げに関する語りは主に被害者意識を基調としてきたが、1960 年代後半に入ると、その語りは加害者意識に視点を向けるように変容した。しかし、安部の引揚げ体験は多くの引揚げ者のそれとは異なっており、そこで語られている日本人引揚げ者たちには加害者的側面を帯びていたために、その言説はこの時期に主流であった言説と相容れなかった。第一章では、引揚げ者を加害者とする安部の「意識」と、多数派の人々が引揚げを被害者意識で語る「現実」との齟齬を考察することによって、安部の「実存主義」の崩壊と彼の引揚げ体験との関連性を指摘した。

第二章では、安部の引揚げ文学とされる『けものたちは故郷をめざす』を対象とし、安部の引揚げに関する言説の特徴的な側面を明らかにした。終戦直後から 1960 年代後半までの引揚げ文学は、当事者の体験記が圧倒的多数であり、そのほとんどは被害者意識を主張として書かれている。この章では、作品に登場する日本人引揚げ者が、同じく引揚げ者である久木久三に暴力を振るっていることに着目することによって、日本人引揚げ者同士の間には葛藤や闘争があったことを安部が重視していたと指摘した。日本人引揚げ者たちの暴力的側面に視線を向けている安部の語りに、被害者意識を重んじる同時代の主流の語りへの抵抗を見出すことができる。続いて、『けものたちは故郷をめざす』と、満洲亡命作家である蕭軍の『同行者』と『羊』との関連性を比較対照することによって、引揚げ文学が必ずしも当事者の実体験のみに基づいて書かれたのではないことを指摘した。そこには、当事者の体験記として出版された、圧倒的多数の引揚げ文学の語りへの安部の抵抗があったように思われる。

第三章では、安部公房の短編小説『異端者の告発』の語り手に焦点を当て、1940年代の安部の引揚げに関する言説の特徴を明らかにした。この章では、「異端」や「異質」であることによって社会から周縁化された語り手の境遇が、戦後の日本社会において「異邦人」とされてきた引揚げ者の実情と類似している点を考察することによって、作者が過去の引揚げ体験を意識しながら『異端者の告発』を創作したことを明らかにした。

『異端者の告発』が刊行された1940年代には、被害者意識が思想の主流となっていたために、引揚げに関する一般的な語りは、その被害者的側面のみ視点に置いていた。しかし、安部は、日本人引揚げ者の加害者意識を「罪」だと考え、この「罪」を語り手の「告発」に代弁させることによって、被害者意識を基盤とする戦後の主流的な語り抵抗したのである。ただし、その一方で、『異端者の告発』の語り手は精神病院に閉じ込められているために、その「告発」の真実性は曖昧なものとして提示されていた。したがって、語り手に代弁されている安部自身の「告発」も、明確なものとはなりえなかった。引揚げ者の加害者的側面を告発する語りが徹底されていなかったため、1940年代の安部の引揚げに関する言説には、当時の主流の言説に妥協する側面もあったのである。

第四章では、安部の『終りし道の標べに』を対象に、作品の改訂箇所を詳細に比較対照することによって、引揚げに関する安部の認識が、1960年代に入ってから如何に変容してきたかを明らかにした。『終りし道の標べに』の改訂に着目すると、旧版のテキストと比較して、新版のテキストでは引揚げ者の視線から描かれる箇所が多いことがわかる。さらに、新版に登場する「私」は、旧版の「私」と異なって、被害者と加害者の両面を持つ人物として設定されている。

引揚げ体験が反映されている新版の『終りし道の標べに』は、1965年に刊行された。この章では、その背景に、日本人引揚げ者たちの被害者的側面を強調してきた語りや、1960年代後半に入ってから変容し始めた状況が見出されると論じた。1960年代後半まで、引揚げに関する語りは被害者意識を基調としてきたが、60年代後半に入ると、その語りは日本人引揚げ者たちの加害者的側面に僅かながら視点を向けるようになっていったのである。そこから、新版の登場人物に加害者的側面が修正されていることは、安部の引揚げに関する語りが同時代の語りの変化の先駆けとなっていたことを示すのかもしれない。ただし、新版の「私」に、被害者的側面と加害者的側面が同時に伺われることから、安部の引揚げに関する記述が引揚げ者の被害者的側面にも視点を向けていることがわかる。したがって、1960年代の安部の引揚げに関する言説には、40年代のそれと共通した側面が伺われ、これは同時代の主流の言説の範囲内に止まっていると結論付けた。

第五章では、安部公房の引揚げに関する言説と、GHQの検閲との関連性を明らかにした。引揚げ者の語りは戦後の言説空間から排除されており、安部もその引揚げ体験を言語化することに困難を感じたと考えられる。さらに、安部が作家として執筆し始めた時期には、日本はGHQによって統治支配されていたのである。GHQによる検閲制度は、引揚げ体験を発話することを困難にしていたために、安部の引揚げに関する言説は、二重の抑

圧を受けていたように思われる。

第五章ではまず、安部の短編小説『牧草』（1948/1968）を対象として、その初出版と改訂版との差異を確認した上で、安部が如何にGHQによる検閲を意識していたかを考察した。続いて、長編小説『終りし道の標べに』（1948/1965）の初出版と改訂版との差異を通して、安部の引揚げに関する言説がGHQの検閲に影響されていたことを論証した。最後に、安部がGHQの検閲に服従しながらも抵抗している、という矛盾する二つの側面を持っていた背景に、彼がシュールレアリスムに傾倒するまでの経緯を見出した。

第六章では、安部の思想的転換が同時期の文学作品に如何に影響を与えているのかを論証した。この章ではまず、安部の転換期の作品とされる『デンドロカカリヤ』を対象として、登場人物の植物化に焦点を当て、この植物化の背景に、「意識」から「無意識」に視点を向けるようになった安部の変容を見出した。次に、実存主義を信じていた時期の安部にとって、「意識」は「現実」に優先するものであったが、安部がシュールレアリスムに傾倒してからは、「意識」と「現実」との力関係が転倒するようになったことを指摘した。最後に、『デンドロカカリヤ』の改訂に焦点を当て、旧版と新版の差異が占領後の日本が依然とアメリカに抑圧されていることを示唆していることを考察した上で、そこから共産主義に傾倒した安部の眼差しが伺われると指摘した。

続いて第六章では、『S・カルマ氏の犯罪』を対象に、主人公が物質としての壁へと変形することに焦点を当て、この変形が、「意識」が「現実」に代替される状況を示唆しているとの結論を提示した。また、壁への変形が、周縁化されてきた「物質」が中心的存在と化す過程であると指摘した上で、その背景に周縁的存在に視点を向けている共産主義の影響を見出した。第六章では、前衛的な代表作『デンドロカカリヤ』と『S・カルマ氏の犯罪』を分析することによって、安部がシュールレアリスムに傾倒すると同時に、共産主義にも接近し始めたことを明らかにした。

第七章では、安部が日本共産党に入党してから創作した作品を対象に、引揚げ文学以来注目し続けてきた被抑圧者の加害者的側面と被害者的側面の葛藤を明らかにした。さらに、この章では日本共産党との間に生じた確執を考察することによって、安部による共産主義理解の独自性を指摘した。

この章ではまず、BC級戦犯のインタビューをもとに書いたルポルタージュ『裏切られた戦争犯罪人』と、このルポルタージュを下敷きに作られたシナリオ『壁あつき部屋』を通して、安部がBC級戦犯の被害者的側面を強調すると同時に、その加害者的側面への言及を極力避けている点を指摘した。日本共産党に入党後創作した作品に見られるこのような偏向は、安部が引揚げ者の加害者的側面を暴露する際の言説とは対照的なものであった。さらに、第七章では、安部公房が抱き続けてきた矛盾・対立の意識を究明することによって、彼が如何にして日本共産党に対して懐疑的になったかを明らかにした。本章では、安部と日本共産党との間に確執が生じた経緯を、エッセイ集『東欧に行く』から読み解いて確認した。この作品において、安部は東欧で実感した排外的な民族主義に関心を寄

せ、東欧で発生した反体制暴動などの抵抗運動を高く評価していた。安部は東欧の人々がソ連の抑圧に対抗する必要性を強調し、ソ連の抑圧と民衆の反抗との衝突によって生まれるエネルギーが重要なのだと考えた。しかし、日本共産党指導部はこのような東欧とソ連との衝突を否定的に受け止めていたために、安部はそこから党指導部の政治方針を懐疑するように至ったのである。

このように第七章では、安部が各種の葛藤を作品に内在化していたことに焦点を当て、安部自身も日本共産党との確執を東欧での外遊体験によって意識するに至ったと考察することによって、安部公房独自の共産主義が如何なるものであったかを明らかにした。

安部自身が語っているように、『砂の女』以前の彼の作品は主に、実存主義、シュールレアリスム、そして共産主義という三つの思想を反映してきた。本論文における一連の考察を経て、とりわけ、引揚げに関する言説、GHQの検閲、「周縁」的存在と「中心」的存在の力関係などのテーマを追究することによって、『砂の女』以前の安部公房の思想的転換のプロセスを明らかにした。